



●砂のなかの星たち

—砂底に生息する棘皮動物—

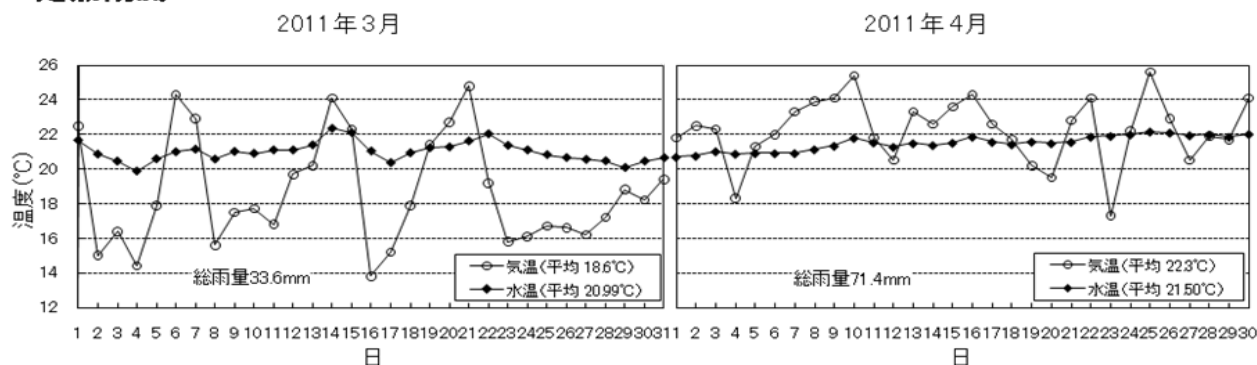
だんだんと夏に近づいてきました。夏といえば台風ですが、今年は1号目から慶良間に向かってきました。これから先の台風はどうでしょうか？ここ数年は慶良間を直撃する台風が少なく、直撃しても大きな影響は見られていません（去年は2つの台風が慶良間の真上を通過したのですが、いつ通過したのかわからないくらい被害は小さなものでした）。もちろん台風は人間だけでなく、海の生き物にも大きな影響を与えます。サンゴにも、台風が良い面でも悪い面でも影響を与えることは、前にアムスルだより（No.92）でお話ししました。しっかりした岩に張り付いているサンゴに対してさえそうなのですから、波に動かされて地形すら変わってしまう砂地にすむ生き物にとっては、きっとさらに大変なことでしょう。今回は、そうした砂地にすむちょっと気

になっている生き物についてお話しします。

砂地の特徴は、なんといってもその‘やわらかさ’です。岩のように固い場所は頑丈なので、その表面に張りつくようにしてくらすのには都合が良いのですが、もしそこが平らな場所ならば、かくれることもできません。砂地はというと、すでに書いたように波で形が変わるほど動きやすいので、言い方を変えると‘不安定’で、例えばせっかく表面に植物が生えても、ひと波で砂に埋もれてしまうかもしれません。けれども、砂の中にもぐることができるならば事情は変わります。そこは、敵におそわれにくい、安全なすみかになるのです。また、砂の一粒一粒はとても小さなものですが、それが無数にあるということは、とても広い表面やたくさんのすき間があるということの意味しますから、バクテリアなどの微小な生物やごみのような粒を食べてくらす動物にとっては、良いエサ場となります。

そういうわけで、砂地を探してみると、バイカナマコなどの大型のナマコが転がっていますし、フタスジナマコが砂にもぐっていたりしています。ナマコの仲間は、砂粒の表面やすき間のごみなどを食べる動物なのです（アムスルだより No.61 で紹介しました）。また、ウニの仲間のブンブクは、大変な砂掘り名人で、砂にもぐるだけでなく、その中を移動してくらしているの、なかなか生きたブ

定点観測



ンブクにはお目にかかれませんが（同No.64）。この間、死んだ魚は海の底でどうなるのか知りたくて、魚の肉のかけらを砂地の上に置いたまましばらく観察していると、やがて短くて細いひものようなものが砂の中から出てきて、もぞもぞと動き始めました。ゴカイの仲間かな、と思いましたが、どうも違うようです。ひものは、どうやら魚の肉をねらっているようなのですが、片方の端をいつも砂の中に入れていて、全体が見えません。こうなると死んだ魚の将来より、ひもの正体の方が気になります。思い切ってぎっくりと砂ごと掘りおこして探してみました。出てきたのは、小さなクモヒトデの仲間でした。深海の海底にたくさんのクモヒトデが生息している場所があることは知っていましたが、砂の中に埋もれて暮らすクモヒトデがいるとは、新たな驚きでした。

こうした動物を見るたびに、何もいないように見える砂地がどんどん面白くなってきますが、実は、ここしばらくずっと探しているけれども、まだ生きてものに出会っていない動物がいます。それは、カシパンとモミジガイです。カシパンとは、また変な名前ですが、ウニの仲間です。といっても長いトゲはなく、短い毛のようなトゲの生えた円盤の形をしていて、上の面に5枚の花びらの模様がうきでています。これも砂にもぐって暮らし

ている動物で、これまでに慶良間の海底から集めた砂の中からミナミヨツアナカシパンの幼体（冒頭の写真）が見つかったという記録があるのですが、生きた成体を見たことがありません。それから、モミジガイというのは、“貝”という名前ですが、ヒトデの仲間です。薄っぺらい星型の体で、砂の上やもぐってもごく浅いところにすむ動物で、モミジガイやカスリモミジガイの仲間が何種類かは慶良間の海にすんでいておかしくないのですが、まだ見つかりません。これからの季節、みなさんも海に行くことが多くなると思います。もしもカシパンやモミジガイを見つけた時には、ぜひ研究所にも教えて下さい。

● 阿嘉島の海より

今年はゴールデンウィークと同時に沖縄地方が梅雨入りしたため、雨や曇り空の多い大型連休になってしまいました。また、例年のこの時期に比べて海水温も少し低いため阿嘉島を訪れたダイバーからは「寒い」という言葉をよく耳にしました。

3月に起こった東北地方の大震災やそれにとまなう自粛ムードの影響もあってか、今年のゴールデンウィークに島を訪れた観光客は例年に比べてかなり少なかったようです。今後もしばらくは色々な影響がでてくることになるのでしょう。